

石狩浜を調査して

石狩浜海浜植物保護センターと 共に歩んだ 20 年間

北海道大学大学院農学研究院 松 島 肇

私が石狩浜で調査を開始したのは、丁度、海浜植物保護センターが設置される時期であった。この頃の石狩浜は、オフロード車の砂浜や砂丘への乗り入れ利用が盛んになってきた時期であり、植生の裸地化や地形の改変が問題視されるようになってきた時期であった。1978 年から 1995 年の空中写真を比較して、海浜植物に覆われた砂丘の面積を比較したところ、1992 年までは年々減少していることが確認されたが、ロープ柵による車両の乗り入れ規制を同年に実施した結果、海浜植物群落が回復したことが示された。車両の通行により裸地化した砂丘で植生回復試験を行った結果、1 年で乗り入れ前の 8 割程度まで回復することがわかった（図 1）。この結果をもとに、関係機関の協力により、海浜植物群落を守るためにロープ柵を設置するなど、保全対策を実施していただいたが、その後もロープを切るなどして乗り入れは後を絶たなかった。そこでオフロード車の利用者を対象にアンケート調査を行ったところ、ほとんどの利用者は海岸草原が希少な自然草原

であることを認識していないことがわかり、さらに海岸草原の希少性を情報提供することで乗り入れ規制への理解が広がることが示された。そのため、石狩市や市民団体など関係機関の協力を得て草原の希少性を説明する看板の設置や、利用者のマナー啓発を目指したカントリーコー

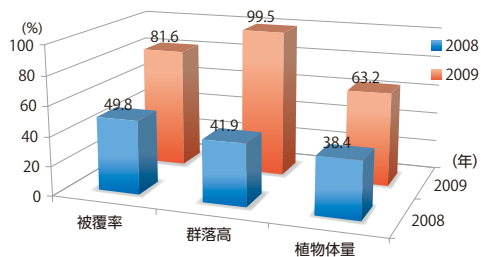


図 1 車両乗入れ規制による海浜植物群落の 1 年間の回復率 (Matsushima et al. (2010) を改変)。数値は隣接する自然草原を基準とした相対値。

ド（地域ルール）を作成いただいた。その後、NPO いしかり海辺ファンクラブの皆さんの多大な尽力により、石狩浜で遊んでいる人々へのカントリーコードの周知を毎年実施いただくこととなった。近年の海水浴離れの影響か、一時期に比べると利用者数は減少したが、石狩市の監視員が毎日、巡回しているにも関わらず、いまだに砂丘上を走る車両やゴミの放置はなくなっていないのが残念である。常にこの環境を気にかけている人の目があることを意識してもらい、さらにその素晴らしさに気づいてもらえるように情報を発信していくことが益々重要となる。日本では、自然のままの草原が成立する砂丘は希少な存在である。国内の国立公園等で保護されている自然海岸と比較しても、石狩海岸はその自然度の高さが際立っていた（図 2）。海と陸の間に位置するこの希少な環境（景観）には、攪乱により成立する特有の生態系が成り立ち、さらに東日本大震災以降の防潮堤に代表される復旧事業の現場では、砂丘は自然の防波堤としても大変優秀であることがわかってきた。例えば、防潮堤は年々劣化し、一度壊れると復元

するには多大なコストが必要であるが、砂丘は植物の成長と砂の供給により年々成長し、波浪や侵食により破壊されても、自律的に復元することができる。この生き物と環境の絶妙なバランスにより保たれている素晴らしい環境を保全し、次世代へと引き継いでいくためにも、海浜植物保護センターが中心となり、多くの人々がこの自然環境を誇りに思い、愛着を持って利用してくれることを期待したい。

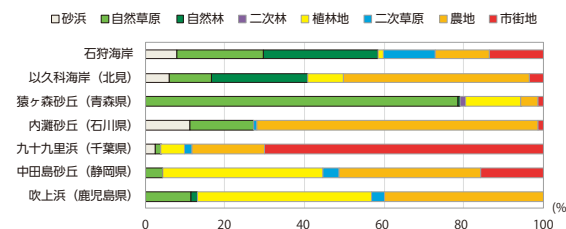


図 2 汀線から 1 km 範囲内における土地利用の植生自然度比較 (松島ほか (2014) を改変)。自然草原・自然林の割合の大きさが自然度の高さを示す。



志美北三線から石狩川河口方面を望む空撮。